

海外交流演奏会実践報告

音楽科教諭 高橋 裕

1. はじめに

音楽高等学校である本校の教育の目標は、言うまでもなく将来の優れた作曲家や演奏家、音楽家、教育者を育てることにある。本校では音楽基礎科目の音楽理論、音楽史、演奏法にソルフェージュ、音楽実技科目の専攻実技に合唱やオーケストラ、室内楽や重奏、ピアノ初見アンサンブル、副科ピアノ、副科声楽、副科打楽器等々の数多くの音楽科目が互いに関連性を持ちながら、有機的に繋がりのある、広い視野に立った多角的な学びができるように考えられている。

本校は東京芸術大学音楽学部の教授、准教授、講師並びに本校教諭、講師による100名程の教員による教育活動を行っているが、海外からの招聘教授陣による定期演奏会での指揮(資料 6.(4))や授業、公開レッスン(資料 6.(5))も度々行われている。

本校の生徒の中では大きくは洋楽専攻の生徒と邦楽専攻の生徒に分けられるが、その洋楽の生徒を教える専攻実技の教授陣の多くが海外留学の経験や、海外公演を数々行う経歴を持っているのが現状である。これは、やはり洋楽が生まれ長年にわたり育まれ、演奏され続けてきた土壌や風土で学ぶこと、またその地の音楽家、演奏家に習い学ぶことの重要性を物語るほんの一例に過ぎない。

生徒個人でもヨーロッパ等の講習会(資料 6.(1))や海外コンクール(資料 6.(2))を受けに渡航している者も少なからずおり、海外留学へと繋がる者もいるが(資料 6.(3))、この実践報告においては学校行事として行ってきた海外交流演奏会の報告を主とするとともに、その交流の重要性や意義、成果を問うものである。

2. 本校の演奏会

本校の通常行っている演奏会のうち一番のメインとなる演奏会は、6月に3日間にわたって行われる3年生の公開実技試験と、10月から11月にかけて行われる定期演奏会を挙げることができる。公開実技試験は自分の専攻楽器や専攻の作曲により、それまでに学び培ってきた成果を芸大奏楽堂や芸高201ホールで発表する非常に大切な機会であり、実技試験でありながらも世間からも常に注目され、多くの方々が聴きに來られる演奏会ともなっている。

また定期演奏会は、邦楽の合奏曲、オーケストラの曲、そして全校生徒が出演演奏する合唱とオーケストラの曲等のプログラムからなっている。4月から半年余り、それぞれの授業にて練習を積むとともに、3年生を中心とした自主練習も数多く行われ、非常に密度の濃いまた若々しい清新の気に満ちた演奏を行い、また整理券が必要なほど固定客も集う演奏会となっている。

室内楽の授業においては、弦管打楽器の成果の発表会や、ピアノ初見アンサンブルの授業の演奏試験等も演奏会の形をとっている。

また、生徒会が主催する室内楽アンサンブルの演奏会であるアカンサス・コンサートも、年4回にわたって行われている。

このコンサートは、北区と本校の連携事業として行っている北とぴあのアカンサス・コンサー

トに繋がり、芸高でのアカンサス・コンサートで優秀であったグループが、北とぴあの「輝く☆未来の星アカンサス・コンサート」に出演できる仕組みとなっている。このコンサートは生徒の目標ともなり、励みとなって演奏の向上に一役買っている。そして定期演奏会の前には、オーケストラや合唱も出演する、北とぴあ「輝く☆未来の星コンサート」と名付けられた、地元北区の中学や高校のオーケストラや吹奏楽とのコンサートも行っている。

この他にも2004年より、毎年国内の各地の音楽大学や音楽高等学校との交流を主眼とした交流演奏会を行うようになってきた。これは2年生の修学旅行を発展させた演奏修学旅行として定着し、生徒達とともに作っていく演奏を通しての交流は、各地の当該学校からも感動のある意義深いものであるという高い評価をいただいている。

そして海外での交流演奏会ができないものかという検討がなされ始めたのも、この演奏修学旅行の実現に動き出した頃と時期を同じくしている。

3. 海外交流演奏会の意義

現代においては、非常に発達したインターネットにより、世界の情報も瞬時に知ることができる。また音楽においても世界の音楽を簡単に知ることができ、また You Tube 他で動画としても見ることもでき、居ながらにして世界が近くなった感がある。

しかしながら、ユーラシア大陸の東の端に位置するこの日本の国で、西洋音楽を学び始めて100年余り、果たして十分に西洋音楽が血肉となってしっかりと我々の身体に根付いているものだろうか。

唯一神を奉るキリスト教文化と、八百万の神や仏を信じる日本の文化。幾何学的な庭園と石造りの家に住む西洋の民と、枯れ山水の庭や数寄屋造り等の木造の家に住まう日本の民。イントネーションやアクセント、高低、強弱、長短が大切な西洋の言語と、少しの高低とアクセントのない平板な言語を持つ日本語。牧畜が中心で肉食やパン食が主の西洋と、農耕や漁業が中心で米や菜食が主であった日本。「Yes, No」をはっきり言う西洋の論理的思考と、含みをもった言い方をする情緒的思考の日本人。

また西洋音楽と邦楽の違いにおいても、舞踏のリズム等の3拍子や8分の6拍子など、強弱のある多彩な拍子の西洋のリズム感と、強弱のない平坦な4拍子の邦楽の音楽。和声を伴った厚みのある homophony の音楽や、和声的背景を持ちながらも体的にからむ polyphony の音楽が中心の西洋音楽と、和声を持たない heterophony の日本の邦楽。

いずれにしても西洋と日本とは根源的に大きな違いがあることを認識していなければならない。

本校の生徒や日本人の学生が海外の国際コンクールで優秀な成績を得ることも数多く見受けられる今日ではあるが、一般に日本人の演奏は、テクニックは素晴らしいが、個性的な自己表現やダイナミックな魅力溢れる演奏をしていない、等の評が少なからずあるのも事実である。これも日本と西洋との様々な根源的な違いによる、音楽性の問題からきているのかもしれない。

芸高が世界的に通用する演奏家や作曲家を育てるためには、国内だけの学びや交流演奏会ばかりではなく、海外講師からのレッスンや海外との交流を行うことによって広い視野を持つことができるようになるとともに、大きく音楽性を広げていくことが必要となる。

生徒にできるだけそのような機会を持たせてやりたいとの願いから、このような海外交流演奏会の動きもできてきたのである。

また本校は、唯一の国立の音楽高校であり、また邦楽専攻を設けている高校は本校しかないこ

とを考えると、こちらが学ぶと同時に、日本の西洋音楽の習熟のレベルの高さを知らしめることも、また日本の邦楽を世界に発進することも我が校の重要な使命として考えるものである。

4. 海外交流演奏会

本校が1954年に創立されてから58年間において、つい近年に至るまで海外との交流演奏会がなされたことはなかった。これは言うまでもなくその労の多さ、予算の問題、楽器の運搬、相手校相手国との連絡の問題等々、非常に多くの問題を抱えることとなり実現が困難と思われてきたからだと思われる。

その実現のためには、やはり相手校相手国をよく知悉し中心となって動くことができる教員の存在や、その交流のためのパイプを持っている人材や団体の存在が不可欠である。そして経済的な面や公的な面での折衝においても、東京芸術大学のバックアップなしではなかなかかなうことのできる問題ではなかった。

ここからは、本校が今までとり行った4回の海外交流演奏会を、関係の教員からのレポートをもって報告することにする。教員の役職名は執筆当時のものである。

(1) イギリス交流演奏会 (2004年)

イギリス演奏旅行

教諭 木部敏司

「英国青少年音楽祭」他の招聘を受け、第3学年＝大伏啓太 Pf、瀧村依里 Vn、須賀麻里江 Vn、原裕子 Va、木下通子 Vc、(引率：澤和樹教授、海老原直秀副校長、木部敏司教諭)の5名は、平成16年(2004年)4月25日から5月5日まで、英国各地で演奏(Bartók: 弦楽四重奏曲 No.2/ Dohnanyi: ピアノ五重奏曲)を行いました。

以下、その一部を報告します。

初日26日、新緑の美しいロンドン Regent's Park 隣接の Royal Academy of Music で初練習を行った後、澤先生運転(素晴らしい運転でした)のレンタカーに乗りケンブリッジに移動しました。



翌27日、伝統と歴史を誇る、かの名門校、Eton College 内の PARRY HALL での演奏で大喝采を受け、生徒達は現地の生徒達と交流を深め有意義な時を過ごしました。

翌28日には、ケンブリッジの嘉悦学園教育センターホールで「チェルノブイリ被災の子ども」のためのチャリティーコンサートを行いました。29日にはロッチデイル(Rochdale)に移動し、公立校での演奏をこなした後、30日、5月1日の両日にわたり、今回の演奏旅行のメイン「英国青少年音楽祭(Spirit of Youth in Music Festival)」(会場 Gracie Fields Theatre)で、

他校(The Yehudi Menuhin School/The Purcell School/Wells Cathedral School/St Mary's Music School/Chetham's School of Music)の生徒達と競演し、これまた大喝采を浴びました。生徒も「同年代の若者同士と音楽を通して喜びを共有し合い、大変貴重な体験をすることができ

た」と感想を述べています。

その後、最後の訪問地マンチェスターに移動し、3日に Royal Northern College of Music で演奏、4日には帰国（空港へ向かう、まさに）直前まで、Chetham's School of Music で演奏しました。というわけで、かなりハードなスケジュールでしたが、生徒は皆元気で過ごし、大変有意義な演奏旅行を経験することができました。（響親会報 響 vol.24より転載 記 木部敏司）

この交流演奏会においては、芸大音楽学部の澤和樹教授の長年にわたる度々の英国留学や数々の公演による、人脈や相手校との交流があって実現された交流であり、ほとんど全てが澤教授の手配によって行うことができた交流演奏会であった。

この演奏会に参加した瀧村依里 Vn は、現在オーストリア、ウィーン国立音楽大学大学院に、原裕子 Va は、スイス、バーゼル音楽院に留学している。

（２）パリ、ユネスコ平和祈念コンサート（2007年）

ユネスコ平和祈念コンサート

東京芸術大学理事、副学長、ユネスコ平和祈念コンサート・パリ公演団長
渡邊健二

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校のオーケストラが4月23日にパリのユネスコ本部、4月25日にパリ日本文化会館で演奏会を行いました。

今から4年前の2003年2月6日、パリのユネスコ本部で行われた親善大使大会で、英国のチャールズ皇太子がロンドンのパーセル音楽学校の生徒たちの演奏をチャリティーコンサートとして披露されました。ユネスコ親善大使としてそれを聴かれた平山郁夫文化財保護・芸術振興助成財団理事長は、その当時東京芸術大学の学長も務められていたため、音楽学部附属音楽高等学校の演奏をユネスコで披露することを考えられたのが、今回の公演の発端となったのです。しかし、実現にはやはり紆余曲折があり、一時は不可能ではないかとも思われたのですが、4年間の歳月をかけてようやく現実のものとなりました。なお、今回のコンサートは、世界の紛争や貧困に苦しむ子どもたちのための平和祈念と、コンサートを通じての募金活動による子どもたちの教育環境向上を願って、「ユネスコ平和祈念コンサート」と銘打って行われました。

コンサートは尾高忠明氏の指揮のもと、平成18年度の卒業生及び平成19年度の2年生、3年生の弦楽器、管楽器、打楽器、ピアノ（チェンバロ演奏）、及び演奏補助の大学生数名の約70名によって行われ、バッハのブランデンブルク協奏曲第4番、レスピーギのリュートのための古代舞曲とアリア第3組曲、ドヴォルジャークの交響曲第8番が演奏されました。

100を超える世界の国々からの1000名以上のお客様を迎えたユネスコ本部第1会議場での演奏会では、鳴りやまぬ拍手に、当初予定になかったアンコールとしてドヴォルジャークの第4楽章の一部を演奏し、スタンディング・オベーションの歓迎を受けました。



ユネスコ本部の演奏



生徒を激励される平山理事長

一見普通に見える高校生たちが、ひとたび楽器を持つと、がらりとプロの演奏家になる姿が印象的だったのででしょうか。「高校生がどうしてあんな凄い演奏ができるのか。」「日本の音楽教育のレベルの高さを実感した。」「まさにスタンディング・オベーションに値する演奏だった。」等々の評価をいただきました。聴衆の温かい声援を受けた生徒たちの輝く顔は忘れられません。リハーサルには平山理事長も激励に来てくださいましたし、演奏会に先立っては、理事長自らのフランス語による挨拶が行われました。また、玉井賢二専務

理事のご尽力により24日朝のNHKニュースでも報道されたので、ご覧になられた方もいらっしゃるのではないかと思います。

23日の成功で自信を付けた生徒たちは、25日のパリ文化会館でも一段と精度が上がったアンサンブルを披露し、満員の聴衆を魅了しました。ここでも、多くの方から、期待した以上に感動した、何度でも聴きたいとの声が寄せられたのは、望外の喜びでした。

20日にパリに入り、21日、22日の交流協定締結校であるパリ国立高等音楽舞踊院のホールを借りての練習も含め25日までは演奏に集中し、翌26日及び27日には演奏の緊張感から解放されてパリ市内観光も行い、生徒たちは素晴らしい経験を胸にして28日無事帰国いたしました。生涯の思い出となることでしょう。

パリでは連日25度を超える、異例とも言える好天に恵まれました。ただ、未成年の生徒たちを預かる身としては、彼らの自由行動を制限し、集団行動を厳しく管理せざるを得ず、いささか窮屈な思いをさせたのではないかという気もしています。しかし、病気も怪我もせず、盗難にも遭わず無事帰国できたのは誠に有り難いことでした。

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校は、国立唯一の音楽高校として1954年に設立され、早期教育による音楽の専門家育成を目指しています。東京芸術大学教員による音楽の専門実技教育は勿論のことですが、その他、音楽理論や一般教育にも力を入れ、人間的で魅力溢れる音楽家を育成すべく総合的な教育を行っています。卒業生の多くは東京芸術大学に進学し、作曲家や演奏家として国際的に活躍する多くの人材が育っています。また、聴衆の前での演奏が生徒たちの成長には欠かせないとの理念の下、3年生の公開実技試験やオーケストラを含め全校生徒が参加する定期演奏会等の様々な演奏会を行っています。海外での演奏は英国での青少年音楽祭へピアノ五重奏を派遣したケース以外には無く、オーケストラとしての公演は今回が初めてのことでした。国立高校としても初めての試みであり、日本の文化や教育レベルの高さを示し、国際親善に多少なりともお役に立つことができたのは、私共にとって誠に貴重な体験であったと同時に、国立高校の活動として誠に有意義なプロジェクトであったと言って良いのではないかと思います。

4月15日の事前公演、23日のユネスコ本部、25日のパリ日本文化会館と回を重ねる毎に大きく



パリ日本文化会館の演奏

成長する生徒たちの姿を見るのは大きな喜びであると同時に、若者の無限の可能性を改めて教えられるものでもあり、教える側の思い込みで彼らに枠をはめてしまっていた事を実感させられました。ある生徒は「夢のような体験だった。パリに行くまでは演奏について色々な不安があったが、パリに入ったら、すーっと問題も解消して、とても気持ちよく演奏できた。素晴らしいチャンスを与えていただきとても感謝している」と話してくれましたが、参加した者全員の偽らざる感想だと思います。これを糧として、将来の音楽家への道を邁進していただきたいと思います。

今回の公演に際しては、在フランス日本国大使館、ユネスコ日本政府代表部、国際交流基金、全日本空輸、日本通運など、多くの方々のご支援とご協力をいただき、会場であるユネスコ及びパリ日本文化会館の方々にも大変お世話になりました。また、パリ音楽院には練習場所、楽器、譜面台等、多くのものを提供していただきました。

とりわけ、文化財保護・芸術研究助成財団には多額の寄付をいただいた上に、パリの院展に併せて演奏会を聴くツアーまで企画していただき、多くの方々にパリで暖かい激励をいただきました。特に、平山郁夫理事長の発案とご尽力がなければ今回の公演はあり得ませんでした。附属音楽高等学校とそのオーケストラのためにご高配いただきましたことを、粕谷美智子高校長共々心より感謝申し上げます。
(絲綢之路2007-夏 No.54より転載 記 渡邊健二)

ユネスコ平和祈念コンサート プログラム



Programme

Bach : Brandenburg Concerto No.4
Respighi : Antiche Danze ed Arie per Liuto Suite III
Dvorak : Symphonie No.8

Sous le patronage de l'Ambassade du Japon en France

Seiichi Kondo

Ambassadeur extraordinaire et plénipotentiaire,
Délégué permanent du Japon auprès de l'UNESCO

Ryohei Miyata

Président de l'Université nationale des beaux-arts
et de musique de Tokyo

Michiko Kasuya

Directeur du Lycée de musique
attaché à l'Université nationale des beaux-arts
et de musique de Tokyo

vous prient de leur faire l'honneur d'assister au

Concert pour la paix

donné par l'Orchestre des étudiants du Lycée de musique de Tokyo

sous la direction de

Tadaaki Otaka

le lundi 23 avril 2007 à 19h30

Maison de l'UNESCO, Salle I, 125 avenue de Suffren, Paris 7^e
Tél. : 01 45 68 05 16

R.S.V.P. avant le 17 avril : carton-réponse ci-joint
Cette invitation, valable pour deux personnes,
vous sera demandée à l'entrée

(3) 中日青少年交流演奏会 (2010年)

中日青少年交流演奏会

校長 粕谷美智子

中日青少年交流演奏旅行は、上海万博や尖閣諸島問題が起こる以前のことでしたので、比較的にまだのんびりとした雰囲気の中で、全日程を無事に終えることができました。

2008年冬ごろ、中国に詳しい大学前理事（現社会連携センター特任教授）の玉井賢二先生を尋ね、附属高校が中国を訪問して演奏会をしたいのだがと、高橋教諭と一緒に相談に伺ったのが事の発端でした。それから日中友好協会、外務省等の青少年交流を手がけている官庁への行脚が始まったのですが、当初はこちら側の事情をいくら説明しても、なかなかよい返事をいただくことはできませんでした。

ところが、年が明けた2009年に、玉井前理事が、中国日本友好協会副会長井頼泉氏とコンタクトを取ってくださり、高校生交流事業の一環として、20名の受け入れの内諾をいただくことができてから、ようやくこの計画は動き出しました。友好協会からいただいた内容は、北京まで自費で来てくれば、中国内での費用は全部友好協会が持つという夢のようなお話でした。しかし、芸高が主体となって動く国際交流は初めてなので、余りにスケールの大きい内容の回答に戸惑いさえ覚えました。

それから早速企画案を作り、演奏会プログラムを考え、旅費をどのように捻出するか等、やるべきことは山積でした。旅費に関しては、学長宮田亮平基金をはじめ、響親会の有志の方々、そして芸高同窓会からたくさんのご支援をいただくことができました。また、芸高定期演奏会や事前演奏会では出口募金を行い、多くの皆様からの温かなご協力を得ることができたことは本当に幸せなことでありました。

附属高校の事業とはいえ、附属高校単独では、この初めての交流演奏会の企画を推し進める為の知恵は乏しく、大学の社会連携センターや音楽学部演奏企画室が、外部との事務的交渉を助けてくださったお陰で、私達は安心してその準備を進めて行くことができました。さらには、アジア総合芸術センターの毛丫（マオヤ）さんが、中国との交渉や連絡を一手に引き受けてくださり、何とも心強い存在でした。

このように、大学側の大いなる助けを受けることができて、附属高校の中国における「中日青少年交流演奏会」はスタートしたのでした。

2010年3月25日、3時間弱のフライトで北京到着、大型バスに乗り込み車中で急遽ホテルに向かう前に、国家大劇院見学が入ってきました。劇場全体が人口湖の中に浮かんでいます。劇場に通じる廊下の天井はその湖の底になる！上を見上げるとガラス張りの天井には水がきらきらと輝いている、その発想に驚きました。オペラ用、コンサート用、劇用と目的毎に設備の違うスケールの大きさとロビーなどの広さはさすが中国です。

渋滞がひどく、ホテルに立ち寄り、制服に着替える時間が無くなり、旅装束のまま在中国日本大使館広報文化センターを表敬訪問、山田重夫公使より大使館の役割や日中交流の歴史と意義などの説明を受け、答礼に生徒の一人が演奏を披露しました。引き続き旅装束のまま、中日友好協会主催の歓迎晩餐会会場へ。中央音楽学院附属中等音楽学校長他教員・生徒、友好協会理事らが出席され、日本側全員にそれぞれの名前が刻まれた印鑑が贈られ、お礼を兼ねて、芸高生の歌とチェロの演奏を披露しました。早朝日本を出発してから、ずっとスケジュールに追われていましたが、生徒達も立派に役割を果たし、こうして長い一日がようやく終わりました。

26日は、朝から演奏会場になる中央音楽学院附属中等音楽学校へ。まずは会議室で公式訪問の両校長挨拶、記念品の交換などのセレモニー。その後、芸高教員がそれぞれの分野ごとに、レッスンやミーティングをして芸術交流を行い、芸高生徒達には練習室があてがわれて練習開始。午後からはリハーサル開始。最初は、お互いに距離をおいて、舞台の上でもぎこちなさが目立ちましたが、練習が進み、合同演奏のリハーサル頃になると、あちらこちらで交流が行われて、楽器や歌を通して会話が弾んできました。本番の舞台転換は、それぞれの生徒が行うということで、教員は舞台指示に大わらわ。ここでも毛丫さんが、通訳として大活躍してくれました。

大学の会議予定をわざわざ変更して、演奏会に間に合うように日本を発たれた宮田学長ご夫妻の乗った飛行機は、北京には予定通りに到着したものの、渋滞のために残念ながら開演には間に合いませんでした。しかし、ご夫妻が無事会場に到着された時には、大きな拍手で迎え入れられました。演奏会は、両国の民族楽器の演奏から始まりました。中国の生徒二人が、中国語と日本語で司会を勤め、両校が次々に熱演（ソロや室内楽）を繰り広げていく中、プログラムの最後を締めくくるのは、出演者全員の大合奏でした。本校の高橋裕教諭の編曲で、中国民謡「茉莉花（ジャスミン）」と「さくら」を見事に融合させた美しい曲で、大好評でした。会場が友好ムードで盛り上がる中、宮田学長がステージに駆け上がりご挨拶をされ、演奏会の成功を喜び、青少年の交流がさらに広がっていくことを願われました。舞台で全員での集合写真を撮り、生徒達はすっかり打ち解け、思い思いにあちらこちらで友好交流が花開きました。アルコールなしでの打ち上げにも、学長ご夫妻は参加してくださり、大変盛り上がった雰囲気の中、今後の交流の継続を約束し合い、興奮の冷めやらぬ中終了し、学長ご夫妻とはここでお別れです。



27日は、北京研修。万里の長城、故宮博物院を見学、中国のスケールの大きさを改めて実感した一日となりました。夜、夜行列車に乗り込み、上海へ。4人部屋の真新しい清潔な寝台車は、生徒達のおしゃべりには恰好の個室となり、その空間を楽しんでいたようです。

10時間近い長旅は終わり、28日8時前に、上海到着。中日友好協会の出先機関である、上海市人民対外友好協会の方の出迎えを受け、ホームのVIP用出口から直接バスへ。「上海の伝統的朝食を」と美味しい店に案内されましたが、次々に出てくる品々は、長旅と寝不足の胃袋には少々量が多く食べきれないテーブルが目立ちました。朝食を済ませてからホテルへ。元マフィア・ボスの邸宅だったという建物は、木彫の内装で、しゃれた洋館の温かみのある雰囲気と、玄関前の満開の桜にホッとしました。午後からは上海市内見学。テレビ塔と博物館は駆け足での見学となりましたが、バスから眺める風景は、上海万博を目前に控え、近代的なビルが、それぞれ凝った姿で『われこそは…』と空高く立ち並び、中国経済の勢いを目の当たりにしました。

そして、日中や日米の国交回復の舞台でもあり、各国の国賓の宿泊所ともなった「錦江ホテル（錦江飯店）」で、友好協会主催の歓迎晩餐会が開催されました。生徒達のテーブルには、音楽院の生徒代表の数名も参加し、芸高生たちも慣れぬ英語で必死に交流して、時には笑い声が起っていました。若人の交流の笑い声に力を得て、教員方も協会理事や役員との交流に頑張りました。

29日朝、上海音楽学院附属中等音楽学校へ。敷地内には、蒋介石の新婚時代の建物や事務棟、西洋館が点在する、落ち着いた環境でした。その中に、小学4年生から高校生までの年齢の、才能教育を受けるべく大勢の子弟が集まっているそうです。上海の音楽学校長も女性で、両校長挨拶、記念品交換などの行事の後、授業見学。中国伝統楽器による大合奏の練習風景に、芸高の邦楽専攻生は、かなりの刺激を受けていたようです。

昼食後リハーサル開始。ここでも短い時間の中でのリハーサルに、てんやわんやの大騒ぎ。授業で集まらないグループがあったり、合同演奏のリハーサルもそこそこで時間切れの様子であったりしましたが、さすがに普段から訓練されている生徒達は、本番では見事なアンサンブルで答え、ホールこそ規模は小さかったのですが、満員の聴衆の中で、北京同様素晴らしい交流演奏会となりました。上海の日本領事館領事も聴きに来ていただきました。ここでも、ソリストたちへの拍手喝采と合同演奏では、感動の渦に包まれました。

その晩は芸高側主催で打ち上げの晩餐会を開き、上海の生徒達も多く参加してくれて、会場は笑い声の響く打解けた雰囲気に包まれました。中日友好協会の細やかな配慮と、豪華で温かなもてなしへの感謝と共に、全日程が無事終えた喜びに皆の顔が輝いていました。



全日程を常に見守り、行動を共にしてくださった友好協会理事の程氏と李さん、上海の友好協会理事周氏の見送りを受け、30日上海空港より帰国の途に着きました。

6月頃、北京の中央音楽学院附属中から、同じ規模で訪日、演奏会をしたい、姉妹校としての協定を結びたい旨の書簡が届き、ここで蒔いた種は、こうして東日本大震災による1年間の延期はあったものの、2012年3月に、奏樂堂で北京からの生徒達と共に、日本での交流演奏会が再び開催されることによって、大きな花を咲かせることとなりました。

(響親会報 響 vol.30より一部転載 記 粕谷美智子)

～青少年交流演奏会参加生徒感想文～

ヴァイオリン 日比恵三

中国の目覚ましい経済発展と日中間や世界の中で起きている様々な摩擦……。うまく交流できるのか少し心配でしたが、多くの方に温かく迎えていただき、また、北京と上海の人たちと演奏したり食事や話をしているうちに、音楽に対する思いは同じなのだと気づき、諸々の壁は一気に取り払われました。

国家を挙げての音楽教育のすさまじさ(日本の2倍以上の授業やレッスン、校舎の上にある寮、巨大なホール etc.)にさすが中国だと感動する一方、少しうらやましく感じました。そんな環境で何を考えながら毎日を過ごしているのか想像できませんが、安定した高い技術はさすがだと思います。特に、上海で聴いた14歳の生徒達のハイドンの弦楽四重奏は和声的にしっかりと構成されており素晴らしいものでした。

僕たちが演奏したドボルザークのピアノ五重奏は、アンサンブルとしての技術的な面と曲の構成の難しさが理由だと思いますが、丹念に組み立てていったつもりなのに、ハイドンを聴いて和声的な面でまだ不十分だと痛感しました。彼らは僕たち以上に音楽に真剣に取り組んでおり、自分の甘さや未熟さを自覚させられました。

今回、事前に先生方に何回もご指導していただいて、より客観的に自分たちの演奏を捉えることができ室内楽の面白さと難しさを感じました。演奏会では、中国の人達の感想が拍手や歓声に率直に現れており、演奏が聴衆にどれだけ伝わったかが瞬時に各演奏家に手に取るようにわかるのが面白かったです。今後中国で演奏する機会があったら今回よりも喜んでいただけたという証拠の反応がもらえるようにこれからもがんばっていきたいと思います。

最後になりましたが、様々な面で支えてくださった全ての方々に感謝いたします。この経験を必ず僕たちの将来に生かしていくことをお約束いたします。

チェロ 矢口里菜子

私にとって3度目の海外旅行となった今回、初めてアジアの国を訪れました。中国—最も日本から近いと思っていた国は、街も人も日本とは全く違いました。オリンピックの際に建設されたという大きな空港や国家大劇院、北京南駅から乗った寝台特急列車など日本では見られないような、近代化の最先端に行くようなものがあれば廃墟のようなところに人が暮らしていたり…。お金を無心する人、人のすぐ近くで平気で痰を吐くような人がいれば、一方で北京中央音楽院の先生方、生徒さん達のように才能に溢れ、それを一生懸命磨いている人や中日友好協会の李さん達のように日本人よりも綺麗な日本語を話そうとする教養深い人とも出会い…。北京は、その落差の大きさを含め全てにおいて非常にスケールの大きな、未完成の「大都市」という印象を受けました。

個人的には、一日目の大使館表敬訪問と晩餐会にて、突然でしたが独奏の機会をいただいたことも大きな経験でした。

交流演奏会では同世代のとても上手で素敵なチェロの学生さんと一緒に演奏でき、また私の拙い英会話にも根気よく付き合ってもらい、楽しい時間を過ごすことができました。

上海は、北京と比べて街の雰囲気がヨーロッパに近い印象でした。杜月笙の屋敷であったというホテルに宿泊させていただいたのですが、庭の桜の木が花を咲かせていて、それまでの3日間で中国のパワーに圧倒されて少々疲れていたところで、日本の繊細な美しいものにふれ、気持ちが和らぎました。

また、上海音楽院附属中学にある蒋介石の旧邸は、私が幼稚園から中学校まで12年通っていた学校のライトとその弟子の設計による校舎と同時期の建築のためか、同じような匂いがして懐かしい気持ちになったと同時に、国や人が違っても時の流れはどこも同じであることを感じ、なんとも言えない思いがしました。

上海の交流演奏会では私たちよりずっと若い14歳の生徒さん達との共演もありましたが、中学生とは思えない技術と演奏内容のクオリティの高さに、衝撃を受けました。私たち芸高生も、北京でも上海でも真剣に心のこもった演奏ができたと思っています。中国の聴衆の、本当に正直で率直な反応も新鮮でした。

前に述べました私の母校では戦前から今に至るまで戦争という不幸な時代を含め、中国の人達との交流が続いています。

また遣唐使や鑑真のように何百年も前から命がけで両国の掛け橋となった人もいたことに思いを馳せます。音楽という共通の言語でこのような交流を持つことができた幸運と、機会を与えて下さった先生方、毛丫さん、中日友好協会の皆様、北京、上海の音楽院の皆様、一緒に演奏した仲間達に心から感謝します。

14日に青海省で地震が発生し、多くの犠牲者が出たと聞きました。亡くなった方のご冥福を祈り、今も救助を待っている方々のいち早い救出、被災した方々がより早く安心した生活に戻れるように願っています。

ソプラノ 齊藤舞

中国の学生はとてもフレンドリーで、中国語が通じないのに積極的に話しかけてくれたりして、本当に親切で素敵な人たちでした。また、大きな言葉の壁があるかと思っていましたが、私の拙い英単語でも意思は何とか伝わり、気持ちを伝えようとすれば相手には通じるものなんだと思いました。

中国のポピュラーな民謡「茉莉花」と日本の「さくら」を中国と日本の学生全員で合奏しましたが、そのときには本当に、言葉も文化も違う人と音楽でつながることができるということを、実感しました。

中国へ行って、あらゆる中国の文化を肌で感じられたことと、何より、同世代の学生と音楽で交流できたことは、私に多くの感動を与えてくれました。

この計画の実現のためにご尽力くださった多くの方に、本当に感謝しています。

ピアノ 實川飛鳥

今回の中日交流演奏会の旅行は、本当に忘れることのできない素晴らしい思い出になりました。初めての海外での演奏旅行は、日本では味わうことのできない高揚感の連続でした。北京の公演

では、演奏中にしびれるような感覚を覚えました。上海での公演は、終わってほしくない気持ちでいっぱいでした。また、中国の高校生の演奏も、とても興味深く刺激的でした。演奏会最後の合同演奏では、言葉や感覚のちがいをすべて超えたところで、「今皆で1つの音楽を作り上げようとしているんだ」と感じる瞬間に出会うことができました。

演奏会以外では、滞在3日目に訪れた万里の長城や故宮博物院は、見たことも感じたこともない壮大さに言葉を失うほどでした。3日目の夜に乗った夜行寝台列車も、興奮のあまりなかなか眠ることができませんでした。北京と上海の気候や町並みや雰囲気の違いも、話には聞いていましたが、実際に訪れてみてより強く感じました。6日間、書き出すと止まらないほどたくさんの素敵な出来ごとがありました。

この素晴らしい演奏旅行の実現にお力添えいただいたすべての方々に、心から感謝を申し上げます。本当に、ありがとうございました。

ピアノ 黒岩航紀

この度、中日青少年交流演奏会に伴い遠征に選拔され、たくさんのことを経験することができました。大学、高校の先生方、友好協会の皆様には改めて感謝申し上げます。

さて、中国では常に丁寧なもてなしと優遇を受けてきたので何不自由することなく生活することができましたが、中国という国自体が不安定な国であることは容易に読み取ることができました。どこか一人一人に緊迫した空気が漂っていて、人間性にも音楽性にも現れていました。変に遠慮がないというか、はっきりしているというか…。

日本がいかに平和で曖昧かを感じました。

聴衆のマナーがいいとは言えませんでした。演奏する側としてはあまりにもストレートで率直な反応は、やりやすいものがありました。

日本人はおとなしすぎる。何を考えているかわからない。このままでいいのか、これからの課題かもしれません。

最後の上海公演では、どこかこの曲（イスラメイ）を思いきり弾くことに恐れと躊躇を抱いていた僕に先生方と友達は背中を強く押してくれました。いつも支えられてステージ上にいることを、改めて知ることができました。歓声をいただけたことに誇りを持ちつつ、まだまだ未熟だったことも真摯に受け止め、今後邁進していきたいです。

同士の演奏には感銘を受けました。

自身の伴奏したファゴット独奏は、世界で通用する精密さと表現力を感じました。

ピアノ五重奏は5人の音楽の方向性がぴったりで、音楽的に計算された絶妙なバランスと抑揚、個人の演奏能力も圧巻でした。中国のピアニストは、とにかく完璧といわざるを得ない正確さが印象的でした。自分の課題の多さを痛感することができました。

収穫の多い充実した5日間でした。

長唄三味線 渡部進

今回の中日青少年交流演奏会では、大変貴重な経験をさせていただき、有難うございました。

事前の準備から旅行中は、粕谷校長、大平先生、高橋先生、安富先生、そして毛丫さんに大変お世話になり、現地では、北京でも上海でも手厚いおもてなしを受けました。観光までさせていただけて感謝しています。肝心の演奏中に、三味線の糸巻がはずれたり、糸が切れたり、いろいろアクシデントがありましたが、海外で長唄三味線の演奏をすることができて感激です。また、

洋楽器との合奏も初めてのいい経験でした。中国側の生徒さんは、晩餐会でもあまり話さなくて、おとなしいという印象を受けましたが、古典楽器を演奏する生徒さんが洋楽にも精通していることに、大変感心しました。

今回の大切な経験と感動を忘れず、これからも頑張ります。大学でも機会があれば、洋楽とのコラボをしたいと思っています。

中日青少年交流演奏会 プログラム

2010年3月26日（周五）19：00开演
中央音乐学院附属中等音乐学校音乐厅

2010年3月29日（周一）19：00开演
上海音乐学院附属中等音乐专科学校音乐厅

北 京 公 演 节 目 单

- 1）日本 长呗三味线合奏 《东都的回响》
长呗三味线：小泽创也、藤井爱生、波部进
笛：正田温子 太鼓：小川实加子 作曲：山田抄太郎
- 2）中国 二胡独奏 《阳关三叠》
二胡：章海玥 扬琴伴奏：王玉珏 古曲 编曲：闵惠芬
- 3）日本 大管钢伴 《匈牙利色彩回旋曲 c小调 Op.35》
大管：永井怜奈 钢琴伴奏：黑岩航纪 作曲：韦伯
- 4）中国 单簧管协奏 《小协奏曲》
单簧管：薛光耀 钢琴伴奏：张瑶 作曲：韦伯
- 5）日本 钢琴独奏 《东方色彩幻想曲》
演奏：黑岩航纪 作曲：巴拉基列夫
- 6）中国 声乐钢伴 《春江花月夜》
演唱：阮馨爱 钢琴伴奏：郭凡 古曲
- 7）日本 声乐钢伴 《樵木山》
演唱：唐泽萌香 钢琴伴奏：实川飞鸟 作曲：山田耕柞 作词：北原白秋
《钟声响起》 作曲：山田耕柞 作词：北原白秋
演唱：斋藤舞 钢琴伴奏：实川飞鸟 中国民歌
《茉莉花》 演唱：唐泽萌香、斋藤舞 钢琴伴奏：实川飞鸟
- 8）中国 双钢琴协奏曲 《主题与变奏》
演奏：李翔、严瑞 作曲：刘长远
- 9）日本 钢琴五重奏 《A大调 Op.81 第1乐章》
钢琴：实川飞鸟 作曲：德沃夏克
第一小提琴：仓富亮太 第二小提琴：日比惠三
中提琴：栢植蓝子 大提琴：矢口里菜子
- 10）中国 钢琴五重奏
钢琴：李翔 作曲：朱诗家
第一小提琴：严涛 第二小提琴：汤伟剑
中提琴：王绍武 大提琴：许玉莲
- 11）中・日 合奏 《茉莉花与樱花之宴》
演奏：中日双方全体参演学生 编曲：高桥裕

上 海 公 演 节 目 单

- 1）日本 长呗三味线合奏 《东都的回响》
长呗三味线：小泽创也、藤井爱生、波部进
笛：正田温子 太鼓：小川实加子 作曲：山田抄太郎
- 2）中国 丝弦五重奏 《欢乐的夜晚》
琵琶：徐添焯 古筝：王晶 二胡：施悦 柳琴：周艳雯 作曲：胡登跳
扬琴：张钰阳
- 3）日本 声乐钢伴 《樵木山》
演唱：唐泽萌香 钢琴伴奏：实川飞鸟 作曲：山田耕柞 作词：北原白秋
《钟声响起》 作曲：山田耕柞 作词：北原白秋
演唱：斋藤舞 钢琴伴奏：实川飞鸟 中国民歌
《茉莉花》 演唱：唐泽萌香、斋藤舞 钢琴伴奏：实川飞鸟
- 4）中国 弦乐四重奏 《“鸟” Op.33 No.3 第1乐章》
第一小提琴：张金茹 第二小提琴：蒋益梁 作曲：海顿
中提琴：曹亦博 大提琴：李怡雯
- 5）日本 钢琴独奏 《东方色彩幻想曲》
演奏：黑岩航纪 作曲：巴拉基列夫
- 6）中国 声乐钢伴 《我哭泣为我的命运 Piangero la sorte mia》
演唱：张佳宁 钢琴伴奏：欧阳药 作曲：亨德尔
《长鼓敲起来》 作曲：金凤浩 作词：李清思
《祖国之恋》 作曲：印青 作词：屈塬
《玛依拉变奏曲》 改编：胡廷江
演唱：王璟 钢琴伴奏：过薇
- 7）日本 大管钢伴 《匈牙利色彩回旋曲 c小调 Op.35》
大管：永井怜奈 钢琴伴奏：黑岩航纪 作曲：韦伯
- 8）中国 钢琴独奏 《梅菲斯特圆舞曲》
演奏：周末忻 作曲：李斯特
- 9）日本 钢琴五重奏 《A大调 Op.81 第1乐章》
钢琴：实川飞鸟 作曲：德沃夏克
第一小提琴：仓富亮太 第二小提琴：日比惠三
中提琴：栢植蓝子 大提琴：矢口里菜子
- 10）中国 圆号独奏 《第一协奏曲》
圆号：马初晨 钢琴伴奏：丁晓婕 作曲：理查·施特劳斯
- 11）中・日 合奏 《茉莉花与樱花之宴》
演奏：中日双方全体参演学生 编曲：高桥裕

（４）日中青少年交流演奏会（2012年）

日中青少年交流演奏会について

校長 塚原康子

1．本校の国際交流事業と2012年日中青少年交流演奏会

前任の粕谷美智子校長時代（2006～2010年度）に、本校は国際交流事業に向けて大きく踏み出した。その第一歩となったのが、2007年4月パリのユネスコ本部および日本文化会館で開かれた芸高オーケストラによる「平和祈念コンサート」であり、次が2010年3月に北京と上海で行われた「中日青少年交流演奏会」である。そして、2010年の中国での演奏会の答礼として、北京・中央音楽学院附属中等音楽学校と本校の生徒による「日中青少年交流演奏会」が、東京芸術大学アジア総合芸術センター事業の一つとして2012年3月27日に東京芸術大学奏楽堂において開催された。

2011年度で退任される粕谷校長から後任として引き継ぎを受けた際、最大の懸案として後事を

託されたのが、3月11日の東日本大震災によって開催を延期された交流演奏会だった。別稿にあるように、答礼の演奏会は当初2011年3月28日に開催される予定で、前年からさまざまに準備が進められていたのだが、未曾有の震災による甚大な被害を前に、延期はやむを得ない措置であった。とはいえ、年度が改まった後もしばらくは震災復旧の見通しも立たず、交流演奏会の実現はとうてい覚束なく思われた。しかし、秋を迎えて中国側に開催について打診したところ、先方でも校長の交代があったにもかかわらず前向きにに応じてくれ、それを承けて芸大側でも1年遅れの開催が了承された。

たまたま昨年11月初旬、中央音楽学院で開催された「世界音楽週」（特定の国の音楽を1週間にわたり演奏会やレクチャー、ワークショップ等によって紹介する催し。2011年は日本を対象とし、東京芸術大学が窓口となってプログラムが組まれた）に赴いた植田克己学部長と私が、催しの合間を縫って中央音楽学院附属中等音楽学校を訪問、新任の娜木拉校長と交流演奏会の大枠について合意し、一年遅れでの開催が正式に決まった。この間、双方がかくもスムーズに意思疎通できた陰には、中央音楽学院附属の出身で音楽学院卒業後に芸大大学院に留学して博士の学位を取得し、両校の事情に通じている毛丫（マオヤ）さん（アジア総合芸術センター教育研究助手）の尽力が大きい。

中央音楽学院は、清朝最後の皇帝・溥儀が生まれた醇親王家の屋敷跡にある。表通りからは近代的なビルしか見えないが、裏門と奏楽堂付近にはかつての清朝親王家屋敷跡らしい風情が今も残っている。附属中等音楽学校も以前は同じ敷地内にあったというが、1995年に御茶の水にあった旧校舎から現在の大学構内に移った本校とは逆に、2001年に車で20分程の現在地に移転し、今も小学生から高校生まで500人を超す生徒たちの多くが、学寮で生活を共にしながら音楽を専門に学んでいる。今回の演奏会には、その中から選ばれた15名が教職員5名に引率されて来日した。都合で来日できなかった娜木拉校長は、一行の出発前に一人（ないし一組）ずつ試演をさせ、生徒たちの演奏を厳しく指導されたと聞く。

2. 滞在スケジュールと演奏会

一行の来日は3月25日（日）で、その日は宿泊先のホテルで宮田亮平学長や粕谷美智子前校長はじめ来賓の方々を迎えてレセプションが行われ、全員が記念写真に収まった。



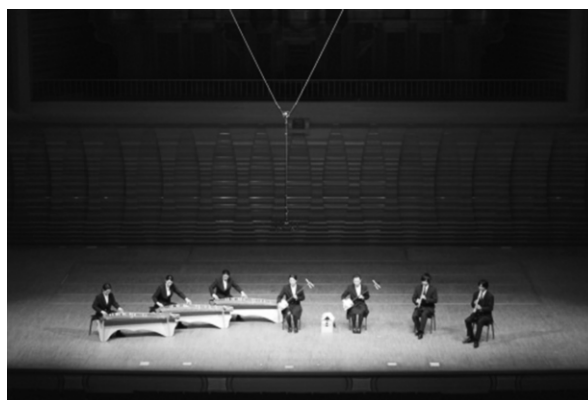
翌26日（月）は朝9時から本校で歓迎式を行った後、ソロやアンサンブルの練習について、本校201ホールで合同演奏曲の練習が行われた。はじめは緊張気味だった双方の生徒たちも楽器を手にとると普段の落ち着きを取り戻し、全員が集まっての合同演奏曲の練習では、揚琴や琵琶・古筝などの中国楽器の響きに注目したり、日本の太鼓を打つ時に発する「かけ声」に驚いたり、初めて耳にする互いの民族楽器の演奏にも関心が示された。昼食時には、生徒同士の交流会が行われ(人数の関係で参加者は絞らざるを得なかったが)、付き添いの先生方抜きでの食事とゲームで盛り上がり、音楽以外でも日中交歓の実をあげたようだ。午後に練習を終えた後は、中国側の生徒と教職員が本校教諭と通訳の毛＼さんに付き添われてバスで浅草近辺に出かけ、短い滞在中唯一の観光と日本の夕食を楽しんだ。



演奏会当日の3月27日（火）は、午前中から奏楽堂でのリハーサルが行われ、午後6時の開演を待った。交流演奏会のプログラムは、日中が交代で演奏する形に組まれ、伸び盛りの高校生によるいずれ劣らぬ力のこもった演奏がつづいた。古典から現代曲までを並べた西洋音楽の演奏と、それぞれのお国ぶりが際立つ邦楽や中国音楽の演奏とを一緒に聴くことができたのも、今回の交流演奏会の大きな特色である。面白いことに、聞き比べると邦楽と中国音楽との違いはもちろんだが、西洋音楽の演奏でも中国側と日本側とでは微妙なニュアンスの違いが感じられ、日頃はそれと意識しないことが隣国の高校生と同じ舞台に立つことで明瞭になるという点に、交流演奏会を開くことの意義をつよく感じた。



演奏会のフィナーレには、高橋裕教諭作曲の《茉莉花と桜の宴》（2010年の北京・上海での交流演奏会に際して作曲された曲の改訂版）が舞台一杯に展開した生徒たちによって合同演奏された。三時間近くに及んだ日中両国の高校生による音楽交流は頂点に達し、音楽を聴き進むうちに一つになった会場の聴衆たちの心を魅了して、演奏会は幕を閉じた。





3. 国際交流事業のもたらすもの

ここで、今回の日中青少年交流演奏会を経験して感じたことを、まとめておきたい。

まず、本校では日頃から定期演奏会、公開実技試験、アカンサス・コンサートなどを通して、数多くの演奏の場を経験させているが、同世代の隣国の高校生との合同演奏会は当然ながらそれらとは異なる効果をもたらすということである。上述したように、レパートリーを共有する西洋音楽については、双方の力量や演奏スタイルの違いがすぐ感得できるのに対して、中国楽器や邦楽の演奏は双方がほぼ初めて耳にするものであったにもかかわらず、そのいずれにも中国と日本との音楽的な資質や感性の違いが示されていた。しかも、相互に演奏を重ねる間に、ある種の「国を代表する」感覚が生まれるとともに、一方では単なる競争心を超えた、音楽に専心する同世代への共感をも生じさせたように思われる。ソロやアンサンブルのみならず、合同演奏曲で舞台をともにした経験が、文字通り言葉の壁を乗り越える最も大きな力になったことは言うまでもない。それはおそらく中国側の生徒たちにとっても同様であったろう。また、これを機会に、本校が音楽高校としては国内で唯一、西洋音楽と邦楽の専攻を併せ持っていることの強みを改めて認識させられた。

今回の中国側の訪問日程が3泊4日と短く、また交流演奏会の終了時刻が遅かったこともあって、26日昼の交流会と合同練習の外には生徒同士の交流の場をほとんどもてなかったことは残念であった。もっとも、リハーサルや本番の合間の小さな機会をとらえて、双方の生徒たちの親密度は増していったようである。こうした部分もふくめて、生徒たちの顔ぶれは変わっても、今後も相互に行き来し音楽交流を重ねることによって、日中の音楽専攻の高校生同士の国際交流を実り豊かなものにしていきたいと考えている。

本事業の実施にあたっては、本校の教諭および職員が、一行の送迎を始め、練習・リハーサルから本番までの必要な手配、レセプションや観光のための打ち合わせ等々、万般にわたる準備を担当した。大学本部ならびに本学音楽学部からは物心両面にわたるご支援をいただいた上、演奏会やレセプションには、宮田学長、植田学部長をはじめとして関係各方面の方々のご臨席を賜った。また、在校生徒の保護者の会である響和会と、そのOB会である響親会、さらに同窓会からも多くの寄付金を頂戴し、交流演奏会にも沢山の方々にお運びいただくなど、懇篤なるご支援を賜った。

5. 海外招へい交流プログラム、レセプション・パフォーマンス

2007年より、ユネスコ・アジア文化センターと日中友好会館より中国や韓国からの教職員や高校生招へいプログラムのレセプションで邦楽等の演奏をしていただけないかとの依頼があった。国際交流という面からも、またなかなか外部での演奏機会の無い邦楽の生徒に経験をさせたいということで、レセプションのパフォーマンスに参加させていただいた。関連項目としてここに記すことにする。

(1) ACCU (ユネスコ・アジア文化センター) 教員交流プログラム、レセプション・パフォーマンス

ユネスコ・アジア文化センターは、ACCU 国際教育交流事業として中国と韓国から初等教育教職員を招へいし、2週間の滞在中に学校や教育・文化施設の見学、一般家庭への訪問、日本の教職員や子どもたちとの交流によって、日本の教育制度やその現状についての理解を深めることを趣旨として事業をとり行っている。

●2007年度10/17 中国教職員交流プログラム 135名

曲目：長唄「越後獅子」「鏡獅子」

長唄三味線：河合悠太、吉田直矢、小澤創也、藤井愛生、渡部進

●2008年度10/15 中国教職員交流プログラム 133名

曲目：長唄「勝三郎連獅子」2世 杵屋勝三郎作曲

長唄三味線：河合悠太、吉田直矢、小澤創也、藤井愛生、渡部進、布施田千郁

笛：正田温子

太鼓：熊谷恵美子

●2008年度2009/2/4 韓国教職員交流プログラム 158名

曲目：長唄「勝三郎連獅子」2世 杵屋勝三郎作曲

長唄三味線：小澤創也、藤井愛生、渡部進、布施田千郁

笛：正田温子

太鼓：熊谷恵美子



●2009年度2010/1/13 韓国教職員交流プログラム 149名

曲目：宮城道雄作曲：「編曲 八千代獅子」

第一箏：倉松麻紗子 第二箏：松井咲

十七絃：池田和花奈

三味線：布施田千郁、佐竹舞香

尺八：中島翔、佐田奏生

(2) 公益財団法人 日中友好会館 中国高校生訪日団歓迎レセプション・パフォーマンス

外務省が実施する中国高校生代表団短期招へい事業は、2007年1月、東アジア首脳会議で日本政府が発表した「21世紀東アジア青少年大交流計画（日中21世紀交流事業）」の一環として、日中の高校生の相互理解と交流を深め、両国関係の強固な基盤を築くことを目的としている。外務省訪問、セミナー、環境施設参観、政治、経済、文化、社会に関する参観等の活動を通じ、日本への理解を深めるとともに、学校訪問、ホームステイを通じ、日本の青少年との交流を図る。

●2009年度10/28 平成21年度中国高校生訪日団第4陣 団員 363人

曲目：「飛鳥の夢」

第一箏 倉松 麻紗子

第二箏 村澤 丈児

十七絃 黒須 里美

尺八 井本 早紀

●2010年度5/19 平成22年度中国高校生訪日団第1陣 団員 297人

曲目：「編曲八千代獅子」

第一箏 倉松 麻紗子

第二箏 松井 咲

三絃 佐竹 舞香

十七絃 池田 和花奈

尺八 中嶋 翔 佐田 奏生



●2010年度 9 / 8 平成22年度中国高校生訪日団第 3 陣 団員 399人

曲目：ベートーヴェン作曲 ピアノ三重奏曲 第 4 番『街の歌』から第 3 楽章

クラリネット	佐藤 芳恵
チェロ	森田 叡治
ピアノ	伊澤 悠

サンジュレー作曲	デュオ コンチェルタント
フルート	林 広真
サクソフォーン	宮越 悠貴
ピアノ	松本 佳子

パフォーマンスの後の交流の時に、中国や韓国の教員から邦楽の生徒の演奏を見聞きし、「生徒達は怒っているのですか?」「どうしてつまらなさそうな顔をして演奏するのですか?」等の質問が何度かあったのは大変興味深かった。「我々日本人にとっては邦楽の演奏時に、顔に表情を出すことそのものが品格を損なうことであり、内に秘めた表現を大切にすることが日本の邦楽の心である」等と丁寧の説明しなければならなかった。

しかし逆に言えば、一般的に洋楽の日本人の演奏等の時に、中国や韓国の人の顔の表情より、やはり表情や表現がおとなしく感じることも確かである。これも単にお国柄と簡単に済ますことの出来ない大きな問題があるように思われる。

交流においては、邦楽の音楽や楽器に対する質問、袴姿の着物に関する興味も多く、生徒達は質問責めにあったり、また写真と一緒に撮ったりしながら交流の大切な役割を果たしていた。

6. 関連資料

交流演奏会とは直接は関係ないが、海外での学び、海外招聘教授からの学び等々を関連資料として掲載する。

芸高生が個人的に海外講習会に参加した国や都市名参加者数(1)、ここ1、2年の海外コンクールの優勝者(2)、卒業生が海外に留学した国と大学名(3)を載せることにする。また、本校の定期演奏会に招聘教授として指揮をしていただいた先生や曲目(4)と、海外講師による公開レッスン(5)もここに挙げることにする。

(1) 2012年度、海外講習会参加者

参考資料として、2012年度に生徒が海外講習会にどこの国のどの都市にいったかのアンケート結果を載せることにする。ほとんどがヨーロッパ各国であった。在籍者数全3学年124名のうち26名ほどが海外の講習会を受けに行ったことになる。

		ピアノ専攻	弦楽器専攻
オーストリア	ザルツブルク	3名	3名
	ウィーン	1名	3名
	ザンクトポルテン		2名
イタリア	クレモナ		2名
	キジアーナ		1名

ドイツ	ミュンヘン	1名		
	ライプツィヒ	1名		
	シュリッツ	1名		
	バーデンバーデン		1名	
	ラインフェルデン		1名	
	ヴェルツブルグ		1名	
フランス	ニース	1名		
	エズ		1名	
イギリス	ロンドン		1名	
スイス	レンク		1名	
フィンランド	ロヒア		1名	
計		8名	18名	合計 26名

(2) 海外国際コンクール

近年特に海外の国際コンクールを受けに行く生徒が増えてきている。入賞者やファイナリストは数多いが、ここ2年の芸高在学時に優勝したコンクールと生徒名を載せることにする。

- 2011年 ヨハネス・ブラームス国際コンクール優勝
 ヴィオラ 大野若菜（3年次）
 第2回マクサンス・ラリュエ国際フルートコンクール優勝
 フルート 新村理々愛（2年次）
 2012年 ウィーン・ベートーヴェン国際コンクール ヤング部門優勝
 ヴァイオリン 高木凜々子（1年次）

(3) 2012年、海外留学

2012年卒業生の中に芸大を受験せずに海外留学した生徒が3名いた。

- ドイツ ベルリン国立音楽大学ハンスアイスラー ヴィオラ専攻
 〃 ケルン音楽大学 オーボエ専攻
 ロシア グネーシン音楽大学 ピアノ専攻

この生徒達は在学中より各大学の専攻教授よりレッスンを受け、早くから志望を固め語学などの修得にも努めていた。

(4) 招聘教授の指揮による定期演奏会

第5回 定期演奏会（1993年）

F.トラヴィス指揮

1. L.V.Beethoven : Overture EGMONT Op.84
2. L.V.Beethoven : Piano Concerto No.2 B dur Op.19

- 3 . C.Debussy : PRINTEMPS-Suite Symphonique
- 4 . G.F.Handel : MESSIAH (Transcription : W.A.Mozart K.V.572)

第 6 回 定期演奏会 (1994年)

F.トラヴィス指揮

- 1 . F.Schubert : Symphony No.6 D.589
- 2 . J.S.Bach : Kantate Nr.4 「Christ lag in Todesbanden」 BWV 4
- 3 . F.Liszt : Piano Concerto No.1 Es dur
- 4 . G.Bizet : L'Arlésienne Suite No.1

第 7 回 定期演奏会 (1995年)

P.デシュバイ指揮

- 1 . Saint-Saëns : Dance macabre Op.40
- 2 . E.H.Grieg : Piano Concerto a moll Op.16
- 3 . W.A.Mozart : Regina coeli K.V.108
- 4 . L.V.Beethoven : Symphony No.8 F dur Op.93

第 8 回 定期演奏会 (1996年)

P.デシュバイ指揮

- 1 . Gounod : Faust Ballet Music
- 2 . F.Poulenc : Concerto en Ré Mineur Deux Pianos et Orchestra
- 3 . J.Haydn : Die Schöpfung (Erster Teil)
- 4 . W.A.Mozart : Symphony No.39 Es dur K.V.543

第 9 回 定期演奏会 (1997年)

G.ボッセ指揮

- 1 . J.L.F.Mendelssohn : Ouverture “Ein Sommernachtstraum”
- 2 . C.M.von Weber : Konzertstück f moll
- 3 . J.S.Bach : Kantate Nr.39 “Brich dem fughigen dein brot” BWV39
- 4 . P.I.Tchaikovsky : Serenade für Streichorchester C dur Op.48

第10回 定期演奏会 (1998年)

J.ロックハート指揮

- 1 . M.Ravel : Pavane pour infant défunte
- 2 . G.Fauré : Requiem Op.48
- 3 . W.A.Mozart : Piano Concerto A dur K.V.488
- 4 . L.V.Beethoven : Symphony No.1 C dur Op.21

第23回 定期演奏会 (2011年)

ヨルマ・パヌラ指揮

第 1 部 邦楽合奏

1. 山登萬和：山田流箏曲「松上の鶴」(箏・三絃・尺八)
2. 宮城道雄：生田流箏曲「遠砧」(箏・三絃・尺八)
3. 初世 杵屋弥三郎：「娘道成寺」(長唄・長唄三味線・邦楽囃子)

第2部

1. J.Haydn：Die Jahreszeiten Hob.XXI
2. R.Schumann：Symphonie Nr.4 d moll Op.120

招聘教授による定期演奏会の指揮指導は、生徒達の英語の語学力の問題が多少あることにはあるが、実際に演奏している曲や楽器の話、演奏上の注意が主となるもので、大きな支障となることはない。それよりもそれぞれの招聘教授の心身から発する音楽の魅力に引きつけられ、生徒達は夢中になって演奏し、また非常にレベルの高い演奏となっているのが現状である。

(5) 海外講師による公開レッスン

この2年間の海外講師の公開レッスンをここにあげることにする。

●エマ・フェランド Vc 公開レッスン 2011年11月22日

プロフィール

NFMS Young Concert Artists Award を含む数々の賞を獲得し、ポール・トルトゥリエのBBC マスタークラスでエルガーのチェロ協奏曲を演奏するなど、イギリスではおなじみのソリスト、室内楽奏者である。英国王立北音楽大学にて教授を務めるほか、ニューヨーク、ロチェスターのイーストマン音楽学校やオスロのノルウェー音楽院にて招聘教授を務めている。2006年には、本校でも公開レッスンを行っている。

1年 平田幸恵

ハイドン：チェロ協奏曲 第2番 第3楽章 ピアノ 亀井綾乃

3年 稲本有彩

ハイドン：チェロ協奏曲 第1番 第2楽章 ピアノ 星野友紀

バッハ：無伴奏チェロ組曲第3番 「クーラント」

2年 藤原秀章

エルガー：チェロ協奏曲 第1楽章 ピアノ 嘉村ゆりえ

●レジス・パスキエ Vn 公開レッスン 2011年12月13日

プロフィール

ジョルジュ・エネスコ賞、シャルル・クロス賞、フランスのレコード・アカデミー賞などの受賞歴を持つ。1985年にはパリ国立高等音楽院ヴァイオリン科および室内楽科教授に就任、同年フランス政府より文化勲章を与えられる。レコーディングも数多い。ベートーヴェン「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」はフランス音楽大賞を受賞している。

2年 荒井優利奈

フランク：ヴァイオリンソナタ イ長調 ピアノ 奥田ななみ

2年 岡本誠司

ショーソン：詩曲 作品25

ピアノ 笹原拓人

2年 城戸かれん

イザイ：悲劇的な詩 作品12

ピアノ 落合 都

●リチャード・ディーキン Vn 公開レッスン 2012年11月22日
プロフィール

現在、英国王立音楽院フェロー及び教授。門下生の多くが音楽界で際立った活躍をしている。ジョン・タンネル・トラスト・フォー・ヤング・ミュージシャンズ、及び、カークマン・コンサート・ソサエティ芸術アドバイザー。オーケストラ・アンサンブル金沢のゲスト・コンサート・マスターとして日本に招かれたのをきっかけに定期的に来日するようになり、東京芸術大学音楽学部の特招教授も務めている。2009年からはスイスのローザンヌ音楽院客員教授も務めている。

2年 盛川奈々

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 Op.35 第1楽章 ピアノ 片岡健人
中平めいこ

サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ Op.28 ピアノ 坂本リサ
小浦場 健

ハチャトリアン：ヴァイオリン協奏曲 第1楽章 ピアノ 片岡健人

海外講師の公開レッスンを見て感動させられるものの一つとして、生徒のどちらかというとは淡泊な演奏が、講師の先生方による、極めて集中力の高いエネルギッシュな指導により見違えるように変わっていくことにある。しかしながら講師の先生方の求めておられる演奏とはやはり差があるのも事実である。

少し前にはなるが、ロシアの高名なチェリスト、イーゴリ・ガブリリッシュ氏の公開レッスンが終わって「芸高生もそうであるが日本人の演奏は概して平板で、自己表現がへただと思うが、ロシアではどのような教育をしているのか？」という質問をしたことがあった。その返答に「ロシアでは楽器を習い始めた子どもの頃から、まず自分を表現させる訓練をさせる。そしてそれを成長しても続ける」という日本では考えられない驚くべき言葉が戻ってきた。音符や音程、リズムを正確にという、日本の子ども達への基礎教育のあり方を根本的に見直していく必要があるように思える。

7. まとめ

音楽には国境はない。5大陸200数ヶ国の国々に様々な民族が存在し、そしてそれ以上に様々な数多くの音楽が存在する。しかしながら素晴らしい音楽や演奏は、言葉がわからずとも時と国を超えて、人の心を打つものである。

未だに世界の国々には争いや紛争が絶えない状況が続いているが、音楽こそが人と人、国と国を繋ぐかけがえのない存在であると言えないであろうか。その故にであろうか、異なる国、異なる民族と音楽を通して交流し、一つの音楽をともに作る喜びは殊の外大きい。何年も音楽院や音大に留学し、オーケストラの団員となったり、音楽院の教授になって帰って来ない卒業生もいる。また結婚して一家を構えている者も少なくないのもそのためであろうか。

若い高校生のうちから、海外に出て交流することによって世界観を広げ、その地の音楽、食事や空気、自然を体感し、音楽を奏することによって世界の人と繋がることの重要性を是非とも感じ取って欲しいものである。

嬉しいことに、選ばれて海外交流演奏会に参加した生徒達もそれに答えて、コンクールや演奏活動において活躍し、また海外に留学している者もいる。大きく育ち世界に羽ばたいて欲しいものである。

今後のことではあるが、本校が行っている2年生の演奏修学旅行も海外で行えないか、現在検討し始めているところである。

唯一の国立の音楽高校である本校の使命として、これからも海外交流演奏会を企画し実現していきたいと考えている。